

Title	E. H. Carr : The Bolshevik Revolution Vol. I.(1950), Vol. II( 1952)
Sub Title	
Author	田中, 荊三(Tanaka, Keizo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1953
Jtitle	史学 Vol.26, No.3/4 (1953. 6) ,p.152(298)- 156(302)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19530600-0152">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19530600-0152</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 書評

E. H. Carr : The Bolshevik Revolution Vol. I.  
(1950) Vol. II. (1952) (Macmillan, London)

ヨーロッパ大學の國際政治學の教授カーアは戰後日本に多くの譯書が出版せられ、廣く紹介せられるやうになつた。ロシアヒリシテは”ドストエフスキイ”(1931年)及び傳記の典型的のもと稱された”バクーイハ”(1937年)の著があるが、そのロシア研究の集大成ともいふのが、このボルシェヴィク革命及びボルシェヴィク革命三巻の續編として書く豫定とせられてゐる。“權力への鬪争、一九一三—一九一七”である。序文の冒頭に”一九一七年の十月革命以來のロシアの歴史を書かうとする全ての無鐵砲なることは聽てのものに明かであらう”。と下り、英米の尺度でソヴィエットをはかることの危険を指摘してゐるが、革命の事件の歴史でなく、それより起つた政治社會經濟の秩序を書くことによつて英米とソヴィエットとの間のあまりにも廣い間隙をうめんとするとして、本書の目的を明らかにしてゐる。更に”現代史の著述はその陥穰を持つてゐる。然し私は、時間が決して適者生存を保證しない磨滅と選擇の過程によつて相當な

量で資料を減少せしめる遙に遠い過去の歴史家の陥穰より、それが大であるとは決して確信しない”との信念の下に現代史の著述と云う困難な仕事を果たされてゐる。

第一部”人と道具”に於て一八九八年の所謂第一回ロシア共産黨會議より十月革命によるボルシェヴィクの勝利までを述べてゐる。レーニンの主な仕事は十月革命後の建設にあり、その基礎となるものはイスクラ時代にあるとして、先づイスクラ時代の理論闘争を述べ、理論の人であり、西歐の型に従はんとするWesterner(元來マルクスもWesternerである)であるメンシヒュヴィクトと、行動の人であり、ロシアに固有のものがあるべかとするボルシェヴィクとの分裂、對立、レーニンのスイスに於ける活動、彼の歸國、四月テーゼ、七月の反戦デモ、コルニロフの叛亂、十月革命等をレーニンを中心として述べ、レーニンと黨、人と道具は今や不可分になつたとし、”政治的に綱領は、ブルジョア民主主義が西方に於て總ての缺點をもつて公民権に於ける長い訓練と經驗なしに、專制政治と社會主義的民主主義との間の間隙に橋渡しする企を含んでゐる。經濟的に發展せる資本主義秩序に適當なる訓練ある労働者及び主要設備に於ける資源を有さない國に於ける社會主義秩序の創造をそれは意味してゐる。勝利を得た十月革命は尙ほ之等の重大なるハンディキャップを克服しなければならなかつた。その歴史は成功と失敗の記録であつた”として

第一部を結んである。

第二部 “憲法的構造” に於て立憲議會の選舉より共産黨がソヴィエット聯邦に於ける總ての權力を握るまでを書いてある。立憲議會の選舉、選舉敗北に對するボルシェヴィクの對策としての社會革命黨の分裂、立憲民主黨の非合法化、反對派の指導者の逮捕を行つた後の立憲議會の解散、第三全露ソヴィエット會議に於ける憲法制定の決定等を述べ、憲法制定の頃の國情及び制定に關する諸問題、即ち國家の權力の強化、地方自治と中央集權、聯邦と統一國家、個人の權利、平等、選舉權、三權分立、テロと暴力、革命裁判所の諸問題を論じ、“獨裁の強化”なる章に於て、“プロレタリアの獨裁なる語は支配階級を規定し……獨裁と代議政治との間に對立はなかつた。……少しのもの或は一人の支配と結合する「獨裁」なる語の感情的な響はその句を用ひるマルキストの心に缺けていた。それに反してプロレタリアの獨裁は住民の大多數を占める階級により行使される歴史に於ける最初の政體である“と冒頭に述べ、内亂により他の政黨を全く終滅せしむる経過を述べ、“黨の霸權”なる章に於て、黨の三つの重大なる發展として①黨の中央への權力の集中②革命黨より政府黨への進化③他の黨の消滅を通じての獨裁の地位の創造を擧げ、黨の規律、黨名の變更黨員のペーパー、組織の強化等の問題を論じ、“黨がその敵を亡ぼすことによつて國家を吸收したやうに見える如くに國家は

今や黨を自身の中に吸收した”と結んだ。最後に“黨と國家”的章に於て黨と同様な國家内に於ける權力の集中の過程を叙し、黨の目的たるソヴィエットに於ける政治的霸權と實際的統御の獲得のために最高に於て中央委員會、最低に於て凡ゆる行政制度に黨員が入り込むことを叙し、“ソヴィエット聯邦内に於ける公的活動の總ての形式に對し、生命、指導、原動力を與へるものはロシア共產黨である。そしてその決定は公式或は準公式の性格の凡ゆる組織を拘束しつつあつた。爾來權力への凡ゆる重要な争ひは黨内で行はれた”と結んだ。

第三部 “分散と再結合” に於て敗戦、革命、内亂による舊ロシア帝國の分裂より再びソヴィエット聯邦に結合し、憲法が制定せられるまでを述べてある。再結合は建設的政治家としこのレーニンの天才に負う所が大であつたとし、再結合の要素としての全人口の五二%を占める大ロシャ人、大ロシャ人による商工業の把握、外敵侵入より起つた愛國心、從屬民族に讓歩を好まぬ白露軍の將軍達の態度、農民の土地を前地主へ返還を好まぬ態度を擧げ、民族自決主義を含む民族問題に對するボルシェヴィクの態度を述べ、“民族自決のボルシェヴィクの主義の終局の表現は社會主義聯邦に於ける平等なる民族の結合である”となし、その機關としての民族人民委員民族議會について論じた。民族問題の實際について五地方に分けて述べ、その“貸借對照表”なる章に於て、内

亂の終結により、”分離する権利“を”結合する権利“に、自由の概念より平等の概念に移行することを述べ、平等化への困難、結合への要素としての①赤軍、②労働組合、③ロシア共産黨、大ロシア人のショービニズム、を論じ、ソヴィエット民族政策が分離の権利の承認より一民族による他民族の搾取の中止へのその進化を完成せることを擧げてある。そして一九二〇年の終りに R.S.F.S.R と八の名義上の獨立國家が内亂の際の軍事同盟より軍事、經濟、政治の結合へ進んだ經緯を説明し、最後にソヴィエット聯邦の憲法制定についての諸問題を論じ、第一巻政治についての部分を結んである。

第四部經濟秩序（第二巻全巻）に於ては、先ず”理論と政網“なる章にて、マルクスの方法は歴史的であり、彼の傳へたものは資本主義の經濟的分析であり、社會主義的生産について論ぜず、資本主義生産の結果と性質の彼の分析より學ぶ他のないこと、まず、明らかにし、ロシアに於けるマルキシズム、農業政策、特に土地問題、ロシア工業の發展を論じた後、”革命の衝撃“、“戰時共產主義”、“新經濟政策、第一段階”的各章に於て、農業、工業、労働者と労働組合、商業と分配、財政の項目に別けて論じている。農業の項に於ては、労働者數によるべきか、扶養家族によるべきかの土地平等分配の問題、土地の社會化法、首都に於ける食糧不足の對策としての資農委員會及び穀物軍、農民の抵抗、割當制、集團農場、内亂による中農への妥協、農民の暴動、農業生産を刺戟するネップへの轉換、物による稅、土地保有の諸問題を論じ、”工業“の項に於て、労働者管理、最高經濟會議、初期の國有化、前の工業の指導者との關係、技術専門家と一人の責任の必要、總ての工業の國有化、トラスト、集中化政策、一九一九年の危機、ネップによる地方工業及び小工業の獎勵、工業の回復等を論じ、”労働者と労働組合“の項に於て、労働組合の國家へ從屬の原則、工場委員會、農業のための労働者を使用する労働業務、労働紹介所、賃銀の平等、労働法等を論じ、”商業と分配“の項に於て地方と都會との關係、供給委員會、分配の労働者管理、闇取引、協同組合、消費組合信用組合の發展、外國貿易、國家による商業の獨占、公定價、分配の三部類、個人商業への復興、民法等を論じ、”財政“の項に於て、銀行の國有、國債の破棄、インフレーション、予算、工業の財源、無料配給、計算の新単位としてのトレッドの使用、安定通貨、國立銀行等の問題を論じた。その間、戰時共產主義よりネップへの章に於て、”革命の最初の八ヶ月はブルジョアジー經濟秩序より社會主義經濟秩序への移行を達成するに失敗した。之迄の主な業蹟は、將來の經濟の基礎をおくより寧ろブルジョアジーと封建的地主の經濟力を破壊するにあつた。その時代的重大法案のいづれもマルキストの意味に於て社會主義の眞正の特性を有さなかつた。“土地の形式上の國有

化、多數の小農への分割、工業の徐々なる國有化、穀物の專賣、銀行の國有等は總て他の政黨の主張するものであり、”然し他の點に於て正統の資本家の慣行より逸脱せることを發見するのは困難であつた“と概括し、レーニンの四月テーゼの”社會主義の採用でなく、生産と分配のソヴィエットによる管理への移行“が遵守せられたことを明らかにした。次いで内亂の刺戟の下に社會主義への移行の第一歩に於ける實驗である戰時共產主義となつたが、ロシア經濟の後進性は資本主義の抵抗の弱いことによつて革命への道を容易にしたが、社會主義建設を困難ならしめ、社會主義の積極的仕事をなすに慎重を要するに拘はらず、内亂の必要は總ての躊躇を除去した。然し内亂の終結は戰時共產主義の運命を決し、その要因は農民の態度であつたとし、”戰時共產主義の經濟的結果は分析のための明らかな出發點を供しない惡循環“、工業生産の恐ろしい減少、個人商業の急速なる成長、國家管理の分配の事實上の崩壊、農民の都會への穀物の引渡しの拒絕、住民の工業中心地よりの離脱、工業生産の壞滅——を形成した。”この悪循環の解毒劑としてのネップは食料供給を増加する農業政策、安定通貨への財政策を含む商業と交換の促進の商業政策、生産増加の工業政策となつた。ネップの本質的特色は戰時共產主義の否定或は逆であつたとなしてゐる。更に戰時共產主義の要素及び解釋を述べ、”ネップ“の國有の傾向は社會主義への移行の二條件の

第一條件、國際社會主義革命を背後にいやり、第二條件、農民の獲得に集中することにあり、第一條件の實際的でないことがより明らかとなつた三年後、社會主義への眞の道としてのネップについてのレーニンの主張は一國社會主義の教義の先驅者として示された。”と結んだ。最後の章たる”計畫經濟の開始“に於て、理論の歴史、經濟的後進國に社會主義社會をたてんとするボルシェヴィイの革命的根本的ディレクマの一様の影響、ソヴィエットにおける計畫經濟の歴史、レーニンの電化案、電化委員會、國家計畫委員會を論じ、最後に”計畫經濟が遂に權力のための争ひの衆人の注目的に現れたのは尙ほ後の事であつた“と結んでいる。

以上が二卷（第一卷、四二八頁、第二卷、三九七頁）の大要である。第一卷はレーニン及びボルシェヴィイクを中心としてソヴィエット聯邦の成立までの政治的經濟を書いて居り、著者は序文に於て歴史を書くのではないとせられてゐるが、ソヴィエット政治史としてその比を見ない立派なものである。論争が多く書かれて居り、たどり難い感を覺えられることもあるが、之が却つて逆効果となつて盛り上る力を感ぜられる。ただ殘念なことはボルシェヴィイクに重きをおかけたため、反對勢力についてはその論争は述べてあるが、詳しく述べられない點である。之は資料に乏しいことにもよるのであらうが、反對派の動勢を詳しく述べることにより、よりボルシェヴィイクの動勢が明瞭になつたろうと考えられ

る。第二卷の經濟的秩序に於ては年代的に三章に別け、更にその中で五項目に別けたことは、通讀して受ける印象が散漫であり、第一卷ほどの感激を與へられなかつた。歴史の著述に當り項目別に書くか、年代的に書くかは難かしい問題であり、特に經濟問題に於ては書かねばならぬ項目が多くありすぎるため、綜合的に書くのは困難なる業であることは明らかであるが、經濟問題は相互に關聯するものであるので、綜合的に年代的に書かれた方がより讀者をして理解を容易ならしめたと考へられる。然し之は寵を得て蜀を望むが如きものであつて、勿論本書はソヴィエット研究の最上級に屬するものであり、現代史ソヴィエット史に關心を有するものの必讀の書であり、現在の情勢に於ては、ソヴィエットを理解するために、一般人によつても讀まるべき書である。第三卷は著者の専門とせられる國際關係について書かれるところで、それに對する期待は大である。

(田中莉三)

の朝鮮史に關する知識は殆ど無いと言つてもよい程である。これは戰前、朝鮮は日本の一部であるといふ理由で、東洋史教育から除外され、そして國史教育からも省かれてゐたといふやうな事情にも依ることと考へられるが、更に戰前戰後を通じて、一般向の適當な概説書が少く、入手し難かつた故ではなからうか。かゝる意味に於いて、この度び朝鮮史の權威にして、本塾でも講筵を開かれてゐる藤田亮策氏が本書を著はされたことは大いに歡迎されなければならぬ。

本書は目下刊行されつゝある福村書店の「アジアの歴史文庫」全十二冊の一で、元來、中學生を對象にして著された百二十頁餘の小冊に過ぎない。しかしそのためには内容の程度を落してあることなどではなく、寧ろ從來の研究成果を見事に取り入れて、壓縮し結晶せしめたとも言ふべき感さへするのであつて、朝鮮史の入門書として正に恰好の書であると思ふ。こゝに敢へて本書を紹介する所以である。

本書はその内容を一、朝鮮半島 二、有史以前 三、樂浪の文化 四、古代國家 五、新羅の時代 六、王氏高麗 七、李氏朝鮮 八、日本と朝鮮 の計八章に分つてゐる。この中、一、朝鮮半島 では朝鮮の名稱・位置・地勢・風土などについて述べ、最後の八、日本と朝鮮 には日鮮兩民族の親緣關係を民族・言語・歴史等の諸方面から強調してをり、他の二、有史以前から七、李

藤田亮策著

朝鮮の歴史

昭和二十八年三月 福村書店

我が國と最も密切な關係にある朝鮮の歴史を知ることは我々日本人として必要なことであり、且つ義務でもあらう。然るに世人